

# 政治研究結果報告書

—政治研究助成—

西暦 2026年（令和 8年） 2月 20日

一般財団法人 櫻田 會  
理事長 増田 勝彦 殿

研究者名 中村 英俊

大学名・職位 早稲田大学・教授

第43回（令和6年度）櫻田會政治研究助成による研究を下記のとおり実施しましたので、その結果について報告します。

※印の記入項目に関する貴會ホームページへの掲載についても同意いたします。

記

※研究の名称（英語も記入） Research Theme

世界秩序再編過程における G7 体制と日欧関係:安全保障共同体の内外における外交実践

The G7 and Europe-Japan Relations in a Transforming World Order:

Diplomatic practices inside and outside of a security community

※英文抄録（研究目的、経過、成果 250words 以内） Abstract (Purpose, Process, Significance)

This research project asks whether we can observe diplomatic practices of a security community, in the sense of Karl W. Deutsch, not only in the major European countries, but also in the wider 'West' (a Western liberal order) or, more concretely, in the Group of Seven (G7) system, including Japan and the US.

To establish a conceptual and theoretical framework for examining this question, I participated in the international research group led by Professors John Ikenberry (Princeton University) and Thomas Risse (Free University of Berlin). This joint research project focuses on the future of the 'West' and examines the deep contestations of the 'West' from both inside and outside. Looking back on the longer history of Japan and the 'West,' I examine the self-identification of Japan as part of the 'West' mainly from the 1970s through the case studies of the G7, Japan-Europe security relations, and Free and Open Indo-Pacific (FOIP). Utilizing three opportunities to present my paper, I drafted the book chapter in January 2026.

While drafting this book chapter, I also drafted two book chapters in Japanese. First, I examine the European security community practices from three perspectives: (1) the community of resilient liberal practices; (2) the community of practices to refrain from using military forces; and (3) the community to include, not to 'Other', any countries unlike the traditional security/military alliance. Second, revisiting the concept of the security community established by Karl W. Deutsch, I examine its influence on current theories of European integration.

## ※研究の目的・研究方法・意義（日本文 600 字以内）

日米欧 G7 体制は、冷戦期の西側世界において分厚いリベラル国際秩序(LIO)を確立する上で一定の役割を果たした。この秩序がグローバルに拡大して、安定的な世界秩序を構築してはいるが、その限定的な秩序は冷戦後も健在だった。また、北大西洋条約機構(NATO)とは異なる地域統合機構として自律的に発展してきた欧州連合(EU)の主要加盟国は「安全保障共同体」を構築している。本研究は、G7 体制が自由民主主義諸国から成る「安全保障共同体」か、アメリカ主導の伝統的同盟か(あるいは機能的協力制度か)を問う。さらに、この共同体の内外で、具体的には、G7 体制の中で日本や欧州主要加盟国が、アメリカからどの程度自律した外交実践を展開してきたかを問う。

本研究は、以上の問いを考察するための概念的・理論的枠組みを構築するために国際共同研究を展開した。LIO に関する先行研究を多く公刊している、J・アイケンベリー(プリンストン大学)教授と T・リッセ(ベルリン自由大学)教授が主催する国際共同研究に参画して、複数の対面での研究会において議論を重ねて、『西側への異議申立て:国際秩序の将来』をテーマとする共著書を出版する最終段階に入っている。

2026 年に入ってアメリカ第 47 代大統領は、ますます特異な外交を展開しており、西側のリベラル秩序は大きく揺らいでいる。このような状況下、G7 体制における日本や欧州主要国の外交実践を分析する現代的意義は大きい。

## ※研究経過と結果の概要（以下の欄に 35 行以内(1500 字程度)にまとめる）

本研究は、世界秩序論・国際秩序論および欧州統合理論・安全保障共同体論という 2 つの国際政治理論、さらには日米欧 G7 体制および日欧政治関係という 2 つの事例に関する長期に及ぶ研究を基盤に展開した。イギリスを含む欧州連合(EU)の主要加盟国が「安全保障共同体」(長期間にわたって戦争の可能性を考える必要がなくなり、安全で安心して暮らせると多くの人々が感じることができるような意識が醸成されている空間)を構築しているという認識のもとに、本研究では、①この共同体の内部で、②共同体が拡大する過程において、そして③共同体の外部に対して、どのような外交実践が展開されてきたのか考察しようと試みた。特に、「欧州安全保障共同体」の外部にいるアメリカや日本が、1975 年以降に構築された日米欧 G7 体制の下で、どのような外交実践を展開してきたかに注目した。米欧関係を事例とした先行研究は多く存在しているが、日欧関係を事例とする研究は少なく、この点を補うことが本研究の意義であると考えていた。そこで、本研究は、G7 体制が自由民主主義諸国から成る「安全保障共同体」と呼べるかどうかを考察するためにも、G7 体制の中で日本や EU・仏独伊英諸国が、アメリカからどの程度自律した外交実践を展開してきたかを問うことにした。

本研究の概念的・理論的枠組みを構築するために、アイケンベリー(G. John Ikenberry)プリンストン大学教授とリッセ(Thomas Risse)ベルリン自由大学教授が主催する国際共同研究を活用し

た。2024年5月にベルリンで最初のブレインストーミング的研究会に参加して『西側の将来』をテーマとした共編著の企画が具体化していた。2025年5月6-8日には同書の執筆者が草稿を持ち寄って一堂に会するワークショップが米プリンストンで開催され、その前後に「日本と西側の関係」を歴史的に辿って、G7体制や日欧関係における日本の外交実践を考察する論考の執筆を進めた。執筆者の半数近くはフィラデルフィアに移動して、当地で開催されていたアメリカEU研究学会(EUSA)においてパネルを設けて各自の研究報告をする機会も得た(5月9日)。さらに、リッセ教授をはじめとする同書執筆者の数名は、9月11日に加バンクーバーで開催されていたアメリカ政治学会(APSA)でパネルを設けて研究報告をする機会を得た。このピアレビューの過程を経て、2026年1月中旬には担当章(The Self-Identification of Japan as Part of the “West”)の原稿を完成させており、アイケンベリー・リッセ両教授を編者とする著書(*Contesting the “West”: The future of international order*)の一部として公刊される予定である。

本研究に関係するものとして、2冊の邦語による共著の執筆も進んでいる。1つは、『ゆらぐ世界秩序とウクライナ戦争』に「統合の力学はどこまで『他者』を包摂できるか」(いずれも仮題)を執筆している(2025年11月脱稿)。本稿では、ヨーロッパ統合の本質を「安全保障共同体」の形成・維持と捉えて、それが①強靱な自由主義的实践の共同体であり、②武力行使を自制する实践の共同体であり、そして③「同盟」のように特定の仮想敵国を「他者化」しなくても形成・維持され、かつて「他者」として交戦状態にすらあった国家・国民を「包摂」することで形成されることもあると論じている。2つは、K・ドイッチュ(Karl W. Deutsch)の「安全保障共同体論」の学説史的意義を論じるもので、『欧州統合理論と前例なき政体EU』(仮題)に所収される予定である。同書の執筆者会合に加えて、2025年10月19日に神戸で開催された日本国際政治学会の部会(「国際統合のグランドセオリー再訪」)において研究報告をした。

貴財団の政治研究助成を賜ったおかげで、以上のように充実した研究活動を展開することができたことに深く感謝申し上げます。

#### ※研究成果の発表・著書、論文、学会報告等(あるいは発表の計画や形式等)

‘The Self-Identification of Japan as Part of the “West”’ (with Yuki Moritani), paper presented at Princeton Workshop, *Future of the “West,”* 6-8 May 2025;  
Panel 8G, De-Centering the “West”: Challenges of the (Liberal) International Order, Friday, 9 May 2025, European Union Studies Association (EUSA) 19<sup>th</sup> Biennial Conference, Philadelphia; and  
Session, De-Centering the “West”: The Future of the International Order, Thursday, 11 September, American Political Science Association (APSA) 121<sup>st</sup> APSA Annual Meeting, Vancouver, British Columbia, Canada.

‘The Self-Identification of Japan as Part of the “West”’ (with Yuki Moritani), draft chapter in G. John Ikenberry and Thomas Risse (eds.), *Contesting the “West”: The future of international order* (forthcoming).

「統合の力学はどこまで『他者』を包摂できるか」(『ゆらぐ世界秩序とウクライナ戦争』石田淳ほかとの共著、東京大学出版会、近刊)

「ドイツの安全保障共同体論・再訪」(日本国際政治学会、部会 14「国際統合のグランドセオリー再訪」)2025年10月19日

「ドイツの安全保障共同体論・再訪」(『欧州統合理論と前例なき政体 EU』、臼井陽一郎、武田健ほかとの共著、吉南堂、近刊)

**〔注〕 文責は貴研究グループに負っていただきます。個人情報等には十分ご注意ください。**